

星からきた少女

ヘンリー・ウィンターフェルト作 関楠生 訳



星からきた少女

ヘンリー＝ウィンターフェルト作

少年少女・新しい世界の文学—13

NDC 943

ウィンターフェルト,

ヘンリー

21cm 268P

昭和44年

学習研究社



訳者との契約により検印廃止

訳者一関 楠生

発行人一古岡秀人

編集人一石井和夫

印刷一株式会社 金羊社

製本一有限会社 黒田製本所

発行所一株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4の40の5

郵便番号145

振替東京142930

定価520円

落丁・乱丁本は
おとりかえ
いたします。

PRINTED
IN
JAPAN

昭和44年3月20日初版発行 © 昭和45年7月10日 3版発行

8397-448 113-1002

少年少女・新しい世界の文学

13

星からきた少女

ヘンリー=ウィンターフェルト作

関 楠生訳



購入年月日

名まえ

学研

KOMMT EIN MÄDCHEN GEFLOGEN

by Henry Winterfeld

Original German Edition published
by Lothar Blanvalet Verlag, Berlin

Copyright © 1960

Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo



訳者紹介

1924年、静岡県に生まる。東大独文科卒業。1954～55年、ミュンヘン大学へ留学。1964～65年、フライブルク大学で日本語・日本文学の講師をつとめる。現在、東大助教授。「カイウスはばかだ」「死の艦隊」「草原の子ら」等、訳書多数。



さし絵

レギーネ=オフルス=アッカーマン



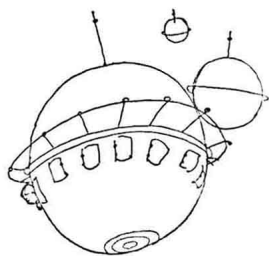
装丁デザイン

山口はるみ



星からきた少女

もくじ





11	地球 ^{ちきゅう} では、泣 ^な く	112
10	きつと、ころんでる	98
9	まさか子どものくびに百万 ^{ひゃくまん} もするものをかけてやるわけもあるまい	82
8	ちゃんとした小さな女の子じゃないか	75
7	病 ^び 気 ^き の子どもを警 ^{けい} 察 ^{さつ} につれていくわけにはいかない	66
6	マンガの読 ^よ みすぎ?	56
5	家 ^{いえ} みたいに大きな鐘 ^{かね}	44
4	牛 ^{うし} って、けもの?	34
3	いい人間 ^{にんげん} もいる	21
2	世 ^せ 間 ^{けん} をさわがす大 ^{だい} 事 ^じ 件 ^{けん}	14
1	女の子がとんできた	7



22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
訳者あとがき	さあ、うちへいそげ	西は東の反対がわ	空には星が多すぎる	アイロン台だって、とおらない	死んだ人間は、さけぶわけにはいかない	沼は、おとな専用	ちくちく、ひりひり	クリーっていうのも、いい名まえ	本は、読むもの	ばか鳥めがバターの上にのった
266	234	218	208	197	181	170	157	144	136	123

Ⅰ 女の子がとんできた

その小さな女の子を最初に見つけたのは、ワルターでした。女の子は木の下にすわって、おくびようそうにはほえんでいたのです。

「おおい、女の子が森のまんなかにすわりこんでるぞう。」と、ワルターはみんなにむかってさけびました。

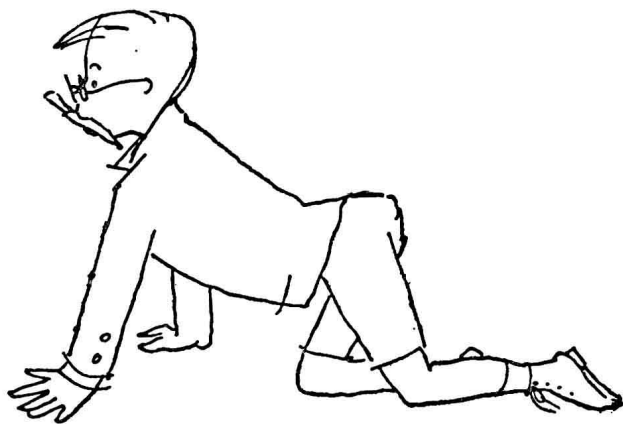
「だれがどこにすわってるって？」と、オットーがはあはあいいながら、よつんばいになって、こんもりとしげったモミの木の下からはいだしてきました。いままで、そこでアンズタケをとっていたのです。ナイフを口にくわえたかっこうは、まるで戦場のインディアンみたいで

す。
夜のあいだに雨がふったので、子どもたちは、ホレの森にキノコとりにやってきたのです。このときは、いつもよりずっと奥まではいって、大きな林道のところまできたのです。ワルターのいもうとのグレーテと小さなロTTYは、いそいで斜面をかけおりてきました。

「女の子って、どこにいろの？」と、グレーテが息をきらしてさけびました。

「見えるわ、見えるわ。」と、ロTTYは大声をあげ、うれしそうに手をたたきました。

見知らぬ女の子は、あいかわらず身うごきもせず、じっと草のなかにすわっていました。



年は七つか八つくらいで、ブロンドの髪かみの毛けが肩かたまでたれ、目は大きくてすみれ色いろ、はだは雪ゆきのようにまっ白しろです。服装ふくそうはたいへん上品じょうひんでした。短いみじか、赤あかいオーバーの下したに青い絹きぬの服きを着き、頭あたまには小さな赤いずきんをかぶり、青いビロードのくつと、はでなソックスをはいているのです。ガラスのようにすぎとおった大きな石をたくさんつないだネックレスが、日光にっこうを浴あびてダイヤモンドのようにきらめいています。

女の子はまるで小さな王女おうじよさまのようで、さびしい森もりにはぜんぜんびったりしません。ただ、ひたいから血ちが出ていて、ひどく頭あたまをぶつけたような傷きずあとがありました。

「名まえはなんというの？」と、ワルターがていねいにたずねました。

「モーよ。」と、女の子はいいました。

「そんなの、名まえじゃないや。」と、オットーがもったいぶっていいました。そして、ポケットからめがね

をとりだしてかけると、じろりとあいてを見ました。女の子はどぎまぎして、赤くなりました。

「それは名まえ？ それともみょうじ？」と、ワルターがやさしくたずねました。

「あたしのおとうさんはカルンバっていう名まえよ。」と、女の子はいいました。その声はおだやかで、気持ちよくひびきましたが、話しかたには、すこしたよりない、外国人ふうのところがあります。

「年はいくつ？」と、ワルターがたずねました。

「八十七よ。」と、モーはいいました。

子どもたちはあっけにとられてしまいました。

「八十七だって？」ワルターは、のろのろといいました。「八つか七つっていうつもりだろうね？」

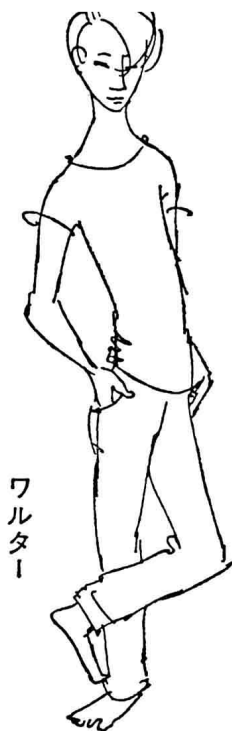
「ちがうわ。」と、モーはいいました。「あたし、八十七よ。はっきり知ってるの。一週間まえにおたんじょう日だったんですもの。」

ワルターは耳のうしろをかいて、

「そいつはへんだな。」というと、あきれ顔でモーをじろじろとながめました。

グレートは女の子のそばにひざをつき、おかあさ





ワルター



モー

んのような心づかいをみせて、たずねました。

「病気なの？」

「ちがうわ。」と、モーはいいました。

「あたし、びんぴんしてるわ。」

「でも、ひたいに傷があるわよ。」と、

グレーテはいいました。「頭をぶつけたの？」

「いたくはないの。」と、モーはいつて、それを証明するように、指で傷の上をなでました。

「ほうたいをしてあげなくちゃ。」と、ワルターがいました。「だれか、きれいなハンカチを持ってない？」

子どもたちはだれも、きれいなハンカチを持っていませんでした。グレーテとロッティは、ハンカチなんかぜんぜん持

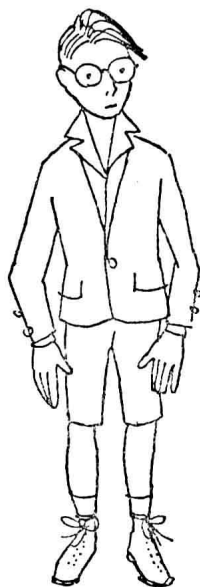
ロツティ



グレーテ



オットー



っていなかったし、オットーは、いやいや、格子^{こうし}じまの大きなのを一まい、ズボンのポケットからひっぱりだしました。が、どうも、きれいとはいえそうもないしろものでした。

「これでいいかい？」と、オットーはたずねました。

「だめだよ。」と、ワルター。

「あたし、一まい持^もってるわ。」と、モーがいつて、オーバーのポケットから大きな白いハンカチをとりだし、それをワルターに見せました。

「これはおとうさんのなの。あたし、自分^{ぶん}のをわすれてきちゃったものだから、おとうさんがかしてくれたのよ。」

ワルターとグレーテは、力^{ちから}をあわせて、ハンカチでモーのひたいをしぼってやり



ました。

「さあ、これではいきんはいらないぞ。」と、ワルターがいました。モーは、うれしそうにその顔かおを見えています。

「どうしてこんなところに来たの？」と、ワルターがたずねました。「道みちにまよったの？」

モーは、ちがうというようにくびをふりました。

「じゃ、いったいどこからきたの？」

「あっちからよ。」と、モーはいつて、上のほうを指ゆびさしました。

ワルターはびっくりして松まつの木を見あげました。そして、

「木の上からかい？」と、うたがわしそうな口調くちようでたずねました。

「もっと上よ。」

「じゃ、雲くもの上から落おちてきたんだらう？」と、オットーが冷笑れいしょうするようにさげびました。

「もっと上よ。」

「もっと上だって？」と、子どもたちはびっくりしてさげました。

「もしかしたら、飛行機ひこうきできたのかもしれないわ。」と、グレートがいました。

モーは熱心ねっしんに、「そうよ。」と、うなずきました。

「ほんとうに飛行機ひこうきできたの？」　ワルターはあきれかえってしまいました。

「そうよ。宇宙船うちゆうせんできたのよ。」

「う、宇宙船うちゆうせんで？」　ワルターはすっかりどぎもをぬかれて、どまりました。

「そうよ。あたしたちの宇宙船うちゆうせんできたのよ。」

子どもたちは、ほかんとして、ものもいえません。

2 世間をさわがす大事件

木々が風にふかれて、サヤサヤと音をたてています。森のどこかで、カッコウが三度鳴きました。リスがおこったような声をたてて、枝から枝へとびうつり、遠くのほうで、低くかみなりの音が聞こえました。それから、またしずかになりました。

子どもたちは、ぼうぜんとして、その小さな女の子を見つめていました。しばらくしてから、ワルターがせきばらいをしてたずねました。

「どこからきたの？」

「アスラからよ。」と、モーがいます。

「アスラ、ね。」ロツティが感心して、ほうつと息をつくようにつぶやきました。

「アスラってなんだい？」と、オットー。

「アスラって、星の名まえよ。」と、モー。

子どもたちは思わず空を見あげましたが、昼間のことですから、むろん星は見えません。もしかしたら火星からきたんじゃない？」と、ワルターがたずねました。

「あんたたちが、あたしたちのことをなんてよんでいるのか知らないけど、あたしたちはアスラっていつてゐるわ。」

